225

きびのさと

NO.96 月刊

第三輯 堂宇篇 第二号

昭和四十一年六月一日 発行 （非売品）

岡山県都窪郡吉備町東町一二五 宇垣方呼電四三七番

吉備観光協会

第55号つき

○ 岩野山金剛院と大賀家の墓所

小西にある。板倉に通ずる街道から跛れて西へ約二百米いった處にある。本堂は三間四面にして本尊は高さ一間半、幅四尺の自然石に

「大本山直轄　南無大師遍照尊　紀念碑　大師講」と刻んである。創建はこの地の素封家大賀綱太（諡を義海という）が明治の初年真言宗八十八ケ所の札所として、岡山市浜田町の智曜山報恩寺から勧請したといわれ「岡山八十八ケ所霊場より西二里」の木札がみあげられている。この本堂は甚だしく朽壊したので昭和四十年八月全部建物は取り除かれてしまった。右側には別に一間半に四尺の大師堂があって、内部に石地蔵尊を安置している。中央に高さ三尺の立像を四段の台石の上に置き、その左には高さ一尺五寸の座像を二段の台石に置いているが、いづれも年号が見当らない。中央の立像は腹部が大きく肥満し他に見られない特徴をもつている。殊に円満福徳の容貌を表現している。観音堂の地蔵尊、祐林寺門前の地蔵尊と共に、優美な姿である。傍に蓮瓣形の豊島石造りの石碑がある。地上高さ四尺ばかり、表面を平たにし、幅一尺ばかり長方形に盆彫りして「丸（梵字）為大神主　御菩提也　施主　大賀氏」。と刻んでいる、これにも建立の年月はない。堂宇は荒れ果てて雑草に包まれ祭祀する人もない。

左側の路傍に「大賀氏墓地」と書いた石の道標がある。この墓地こそ御士の生んだ先覚者理学博士大賀一郎の先祖累代の墓所がある。

一、法叢院観應道信士　安永六年七月十五日（喜右衛門）
法珠院恵光妙照信女　宝暦十三年末六月十五日

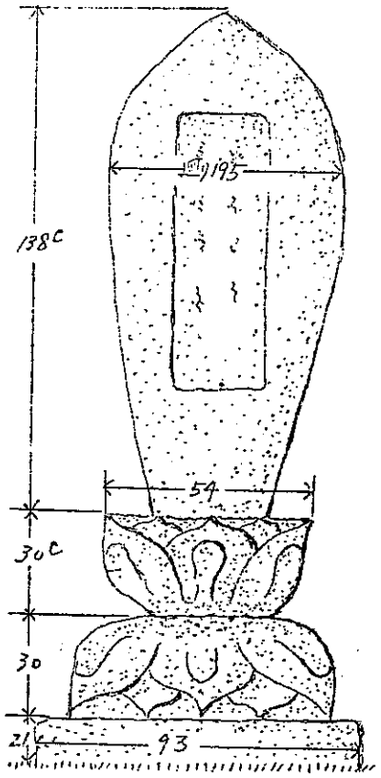
一、還真道渓信士
臨岸妙舟信女　（死没年月なし逆修か、俗名恵蔵ならん）

以上二基とも芋墓にして道渓の墓は寸法たゞの如く観應よりも稍大きく、吉備町内では代表的のものである。

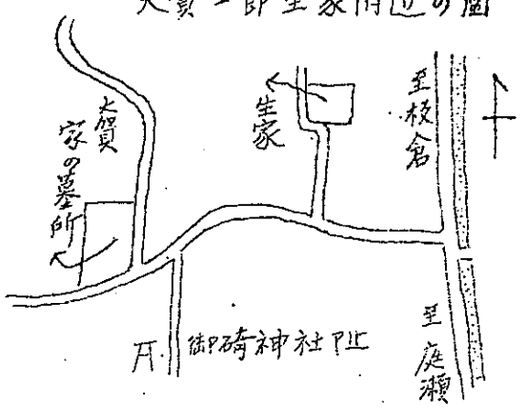
一、鳥真信女　霊　碑名堙滅してみえず　（佐助）

一、慧光道宣信士　安永六酉九月十五日
智光院恵宝大姉　文化十酉十二月八日
円光義周　宝暦三癸酉八月五日　俗名大賀幸次
観月自照信女　明和元申年八月上四日
智月覚真信士　明和八卯七月廿六日　俗名大賀熊治郎
心鏡定徹信士　文化七午三月廿三日
心蓮妙到信女　文化七午五月廿二日　（良作）
義海菩薩　大正八年十月建之　大賀綱太
大賀留子墓　明治四十年九月十八日永眠　（キリスト教信者）

大賀一郎の墓　昭和四十年六月十五日八十二歳
妻うた子の墓　昭和廿一年三月二日　七十五歳
裏面「ハスの花に　神の栄光をたたえて　大賀一郎兄　ここに眠る復活のラッパの鳴らん時まで　教友　坂田　祐　記す」



大賀一郎生家附近の図



○ 大賀家の先祖について

大賀家の先祖は永禄の頃の大賀駿河守の後裔といわれる。同家に伝わる古文書に、永禄四年霜月五日山陰の大守尼子義久が大賀駿河守に宛てた感状と、天正四年十二月十二日羽柴秀吉が大賀勘大夫という人に宛てた

た感状を保存している所から考へると、始め尼子氏の部將であつた。これは中国兵乱記にもみえるが、その後裔が尼子滅亡后秀吉に属したらしい。過去帳によると子孫は浪人して諸国をさまよい、戸川氏が庭瀬に初めて知行を受けた慶長の頃に、大賀景五郎というものがこの地に土着して農業を営んだのが大賀氏の初代と思われる。景五郎から五代後ちの享保年間に喜右エ門という人が豪農として世に出で、安永頃の九代目の喜右エ門は足守、庭瀬、撫川などの領主の御用金の貸出しおよして居り大賀家の全盛時代であつたろうと考へられる。これは墓石の法名に唯一の院号が附けてあることによつて想像せられる。天保十三年八月廿二日に死去した一郎の祖父になる亀三郎の世代に享保九年十一月から享和元年六月までで七十七年間、庭瀬藩に調達した銀高メ三百八貫五百拾弐匁五分。その証文メ三十葉を残らず時の川入村大庄屋大賀喜太郎（当夜）の手に差出して全部帳消しにしている。（徳川時代の銀債六十匁は一両に当るので銀高三百八貫五百拾弐匁五分は五千百四十二両余になる。一両は鄙前の一円で、いまの通貨に換算すると、ざつと二百万円以上になる勘定である）　藩から「田家之儀殊に古証文等差出以ニ付庭人扶持御増　都合弐人扶持被下置以間　家名致永続候様　心掛ケ可申以　未正月」。と仰せられた。年号が不明であるが、恐らく弘化四年ず末と考へられる。板倉氏に古証文を返レ献金の形おとつたのでその賞として些へられたのである。この文面によると加増とあるので、すでに大賀家は板倉氏に仕えていた家臣であつたことがわかる。多分身分の低い御士格であつたろうと思う。（御士は農村に居住した武士のことである）。

かように大賀家は江戸後期に武士階級の財政困窮に対し、相当の金融資本家の役割を演じていたのである。しかし明治以后の変革によつて武士の没落と共に、財界に変動をきたし、その影響を受けて大賀家は次第に逼迫したものと思われる。

幕政倒壊とともに社会の状勢は大混乱を極めた。地主階級のなかには苛酷な手段によつて零細な農民を苦しめて安逸を貪つていた人たちは、報復的な手段として暴力行為によつて焼打事件や襲撃事件を起したところもあつた。また個人同志に結ばれた金銭の貸借関係は帳消となり、借用証文は反故同然になり、当時有産階級で倒産したものは少なくなかつた。どこから流行してきたのか判らないが、朝起ると「皇大神宮」の御剣先が屋根に降つている。と、その家へ多くの人々が集まつてきて御祓を述べると、家人は酒肴を用意して、もてなしをする。大概金持ちの家にきまつていた。集まつた人々は口々に「えーじゃないか。えーじゃないか」と大聲で叫びながら飲み食して次ぎ次ぎと歩きまわる。これは金銭の貸借を棒引にしてしまう手段であつた。

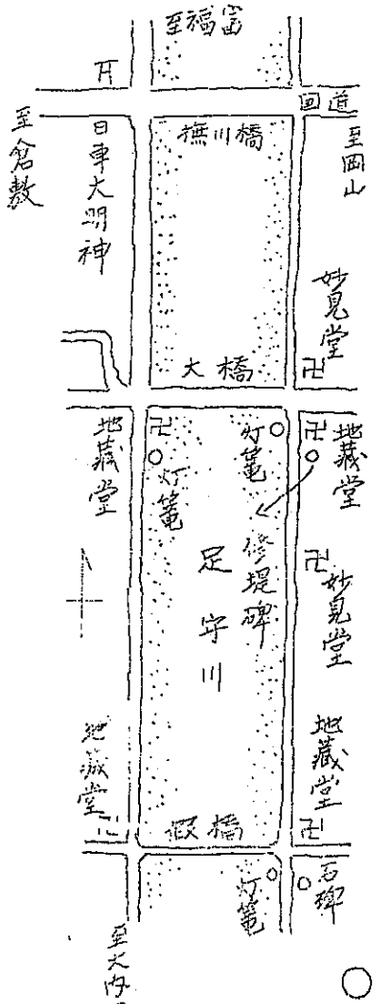
現在田家といわれる家には古い証文を数多く保存しているものがある。これを見ると借用主の子孫がなに不自由なく幸福に暮している反面、貸主であつた子孫が恵まれない、暗い生活を送つているものがり皮肉な世相をあらわした。　これは昭和二十年の敗戦后の財界の変動で混乱し、持てるものと持たざるものとが顛倒したのと相通ずるものがある。

○　高田の地蔵堂

足守川假橋の東堤防にある。南向にしてもと一間四面の四注造の一小堂であつたが、昭和七年頃に間口二間、奥行一間の拝殿を建たのである。本尊は蓮台を有する高さ二尺の石造座像の地蔵尊にして、二段の台石の上に安置する。上段の台石には正面に「村中」右面に「寛政二庚戌歳」。左面に「七月吉日」の銘がある。

堂前には石造の花筒がある。銘に「奉寄前」「雑波權治郎　雑波勘治郎　荒木音三郎　雑波常五郎　宮地長平」「明治

十二卯年」とある。
拝殿の棟札に大書して「昭和七年四月下旬建之　棟梁　高嶋新吉」とある。
堂の天井には名寄進者の家紋を描き、その傍に氏名を書いている。
「荒木新蔵　荒木政蔵　難波多次郎　荒木小平　荒木石蔵　荒木安吉　荒木又右エ門
荒木和三郎　荒木寿枝　荒木兵次郎　難波年直　大蔦儀（屋号は万能屋）中島久兵衛
池上新吉　光畑甚太郎　難波忠三郎　荒木庄三郎　中島宗五郎　難波千代蔵　難波経
徳　難波八右エ門　荒木亀吉、荒木仙七　荒木新六　荒木典五郎　某（これはもと大
庄屋難波純一郎であるが、わざと姓名を秘したという）



○　妙見宮
高田の足守川東堤防上にある。堂は南向にして、間口一間半、奥行二間の本瓦葺屋根である。祭る殿は石造の伽藍塔婆にして碑によれば、苔而内部の中央に「妙見大菩薩」と刻んでいる。創建は詳かでないが、口碑によれば、苔而露に晒らされていたものを、後世信徒が相計って堂をたてたという。

○　大橋の地蔵堂
足守川東詰にある妙見宮と相対する南側にある。一間四面の北向の堂の中央に高さ一尺八寸の石造座像の地蔵尊を二段の台石の上に安置している。上部の台石の正面に「一萬靈　寛延三庚午天七月日」。左面に「平　重良、孫市良、治良兵衛、吉兵衛、好右衛門、六右衛門　甚兵衛。右面に「四良兵衛　七良兵衛、小三良、九兵衛、市兵衛、助兵衛　七良兵衛」。の銘がある。創建は寛延年間と思われるが堂の棟札に「天井宮舗大正十年白三月　東大橋町　女講中」とあるので修復したことがわかる。

○　大橋の妙見堂
足守川の東詰堤防上にある祠門を有する御堂である。祠門の入口に三尺ばかりの小さな石灯籠がある。軸石の銘に「妙見大菩薩、文政五壬午年五月十有五日」。台石に「講中」とある。祠門を這入った左手に一基の石碑がある。「南無妙法蓮華経　寛政四壬子年撫川在町惣講中」。台石に「法界」と彫り込んである。
祠門には横三尺一寸、竪一尺三寸の欅板の扁額をかかげ「祥雲葊（庵）逐育」と彫ってある。
裏面には
「当州（備中）撫川初日方上人也産土也　是故上人将勧請最上稲荷（高松のいなり）宮於撫川大橋堤下心念久矣　今茲元治紀元甲子（元年）春土木相叡　祠門先造且結葊（庵）願扁號祥雲葊　上人請余揮毫　拙不解書以還之　而又彫其字者補全者誌其姓名于文面如左　庭瀬　家宰　森岡善多右衛門武従　一名廷琛　字五宝　号逐育
彫字　同藩　与場平右衛門正文　鋪金　同藩　松宮卯右衛門」。と墨書にて書いている。（後七輯人物篇森岡善多右衛門武従参照）
題目石碑の反対側に手洗鉢がある。銘に「癸嘉永六年五六月吉日」とある。御堂は二間四面にして屋根は入母屋造り本瓦葺である。内陣には「北辰殿」の扁額がある。中央に

御本尊の北辰妙見大菩薩を安置し、右に最上位稲荷大明神、日蓮大菩薩。左に清正公大明神、鬼子母尊天の尊像を厨子に納め崇め奉つている。この御堂は昔から部落の日蓮宗信徒十二家が揃つて祭祀し、毎月十二日に御講の行事をしている。

付物としてたの品々を保存している。

一 紙迎涅槃像　極彩色　掛軸　一幅

裏面に「元治元年甲子十一月　高祐稲荷西山　日方花押　撫川大橋町　祥雪庵　什堅

本願主　富山円平　為先祖代々精霊」。

一 日蓮大菩薩御涅槃拝図　掛軸　一幅

木版摺黒一色、表面に「祭祀主　正保山幸福寺」。裏面に「廿四世福智院日高花押」とある。日高上人は妹尾盛隆寺十八世の弟法にして、明治十七年四月十四日死去している。

一 法橋義信　六十五歳筆掛軸一幅　墨絵なるも甚だしく破損している。

一 鬼形鬼子母神、妙見大菩薩、清正公御尊影の木版摺を併べ合せて表装したもの

掛軸　一幅　年代不詳

一 縁起書　掛軸　一幅　應徳寺覇法　貝老敬道筆（五十九才の時）

明治十三年仲春　貝光　老紗恪誌

聖人（日方）者下撫川村富山孝吉之宗子也　故有而出家志（成）　城隆寺（妹尾町）に於て剃髪得度宗学成辨新了天　稲荷山妙敬寺に住転維時文久三亥年　領主戸川氏の帰依を受け地面拾九歩故於買求免精舎一宇　祥雪庵開祖　智眼院日方聖人　営辨之許可を得たり　最上位稲荷明神併に北辰妙見菩薩を勧請志　本尊奥崇敬志永世此地に留天守護多羅令　武戸云々　明治九年丙子七月初七日稲荷山十五世日方了　是五拾九歳而新天にして一〇九

示寂須臾　信者　講中　地面寄附　世話人三宅忠平　岡　藤吉　熊代善八　坪井弥助

この文献にみられるように、開祖は戸川氏の庇護によつて文久三年に稲荷山の住転日方上人であることは確実であるが、堂前の法界塔には七十年も遡つた寛政四年の銘がある。のは思うに他にあつたものをここに移したのではないかと思われる。また四十一年前の文政五年の銘ある石灯籠によつて或はもとこの橋詰に妙見大菩薩を祭つた一小堂があつたが朽壊したので再興していまの建物に建替たのではないかとも考えられる。

日方上人は下撫川富山氏の出で、文久三年は四十三才の時である。その親族の墓は本宅忠夫、岡氏は一〇五番地の岡　澄吉、熊代氏は二〇番地の熊代善正、坪井氏は一九〇番地の坪井右三郎である。

一 祭礼之図　額面　一架　（横一間　竪一尺）　彩色で描いている。

額面は（板面）右に鳥居があり、山門、本殿と併び、左方には大樹があつて宿坊らしい家屋が見え雑多な服装した参詣者で雑沓を極めている。左偶には番所と覗が描かれて、神一つで麓に打たれている。こまかい筆であるが額面は甚だしく煤けている。おわり　末完

各種ダンボール
パッキングケース
製造
KK大善紙工業
吉備局電三五二・三五三
吉備町下撫川一三二〇

吉備町　本町
矢尾歯科医院
吉備局電一七番　有線四〇五番